

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 28 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520707

研究課題名(和文) ジャンルに基づくライティング指導が英語学習者の文章力と言語力の発達に及ぼす効果

研究課題名(英文) Implementing Genre-Based Pedagogy in FL Classroom: A Longitudinal Study of FL Writers' Writing Skills and Linguistic Awareness

研究代表者

保田 幸子 (Yasuda, Sachiko)

九州大学・言語文化研究科(研究院)・准教授

研究者番号：60386703

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：ジャンルに基づくライティング教授法を受けた英語学習者の変化を「英語力」、そして「ライティング力」という二つの能力に焦点を当て、一年間というスパンで縦断的に追跡した。学習者は、授業開始時のタスクでは、書くという行為を「正しい文法で英文を産出すること」と捉え、「正確さ」に注意を向ける傾向があった。そこでは、相手意識や目的意識といった配慮が欠けており、文法的に正確ではあっても社会的に不適切な語彙を選択する傾向が見られた。しかし、一年後に産出された文章を分析した結果、学習者の相手意識や言語意識には大きな変化が見られ、その意識の変化は、実際に学習者が選択する語彙や文法にも反映されていた。

研究成果の概要(英文)：This study investigated longitudinal changes in writing performance and lexicogrammatical choices of foreign language (FL) writers who engaged in systematically designed genre-based tasks. The findings based on the comparisons of their pre-instructional and post-instructional writing performances revealed that enhanced genre awareness positively affected the way students wrote the genre. At the beginning of the course, the students tended to pay attention to grammatical accuracy rather than sociolinguistic concerns, such as who the reader is, in what situation they write, and why they write the genre. However, at the end of the course, the students demonstrated a significant shift in the ways they conceptualized the genre. Specifically, their concerns shifted to more genre-specific lexicogrammatical issues that could accommodate the needs of the given rhetorical contexts. The changes in their genre awareness also affected their actual lexicogrammatical choices.

研究分野：外国語教育

科研費の分科・細目：英語教育・教授法

キーワード：外国語ライティング ジャンル タスク ジャンル意識 言語意識

## 1. 研究開始当初の背景

ジャンル・アプローチの基盤となっている主要な言語理論は、「言語とは、特定の相手に対して特定の目的を達成するために使用される。言い換えると、**対人的相互作用によって特定の意味を作り出す”meaning-making system”** (Martin, 2009)である」とする**選択体系機能理論** (Systemic Functional Theory, Halliday, 1994) である。

選択体系機能理論に支えられたジャンル・アプローチは、80年代に主流であったプロセス・アプローチを補完するライティング指導法として注目を集めた(”post-process approach,” Matsuda, et al., 2003)。プロセス・アプローチが主に「書き手の思考」や「書き手の認知プロセス」を重視していたのに対し、ジャンル・アプローチは「**書き手を取り巻く社会的コンテキスト(読み手・目的・使用領域・タスクの種類など)**」を重視し、**テキストとコンテキスト**、あるいは**書き手と読み手の関係**に注目することに関心が寄せられる (Hyland, 2007; Johns, 1997; Swales, 1990)。具体的には、次の二つが指導の際のキーとなる。「**テキストとのインタラクション(textual interaction)**」(Tardy, 2009)と「**レトリカル・リーディング**」(Cheng, 2008)である。つまり、複数のモデル・テキストを「読み手や目的によって言語使用の特徴がどう変わるか」という観点から学習者に分析させ、社会的コンテキストに適した構成とスタイル、語彙や語形に対する認識を高め、実際に書く際にそれらを使えるようにすることを目指すのである。

ジャンル・アプローチは、主に、大学や大学院に入学したばかりの学習者が新しいアカデミック・コミュニティで求められる様々なジャンル(レポート, 意見文, 批評, 論文など)を書くことを支援する指導法として導入され、米国やオーストラリアの大学の**ESL教育現場**を中心にその効果が報告されてきている(e.g., Cheng, 2008; Hyon, 2001, 2002; Martin & Rose, 2008; Leki, 2003; Swales & Lindemann, 2002; Tardy, 2005, 2009)。

一方、日本など EFL コンテキストに目を向けてみると、ジャンル・アプローチに関する実証研究の成果はほとんど報告されていない(研究代表者が平成 21~22 年度にかけて実施したジャンル・アプローチに関する予備的調査の報告は 2011 年に *Journal of Second Language Writing* にて発表予定)。その理由は、大学の英作文授業で教えられるものが主に「**意見文**」や「**論証文**」を始めとする“**school-sponsored genre**” (Leki, 1997)であり、結果的に研究対象もこれらのジャンルに焦点を当てたものが多くなるからである(e.g.,

大井, 2005; Sasaki, 2004, 2007; Kobayashi & Rinnert, 2008; 山西 2009; Yasuda, 2006a, 2006b)。しかし、これらの school-sponsored genre のみに特化しては、ライティング指導において最も重視されるべき「**レトリック認識(rhetorical awareness)**」が育たない可能性がある。なぜなら、意見文や論証文の読み手は主に「**教員**」であり、書く場面は主に「**教室**」内であり、**読み手や目的に応じて言語を使い分けるとい**う “**language as a meaning-making system**” (Martin, 2009)が実感にくいからである。こうした背景を受け、読み手や書く場面や書く目的を**教室外のより広い社会的コンテキスト**に設定した「**ジャンル・アプローチ**」の効果を検証するため、研究代表者の保田は、平成 21~22 年度にかけて予備的調査を実施した(科学研究費補助金若手研究スタートアップ・課題番号 21820041)。その結果、ジャンル・アプローチに基づく授業を受ける前と受けた後で学習者のレトリック認識に大きな変化が見られ、そのレトリック認識の変化が学習者の文章の改善につながっていたことが分かった。しかしながら、この予備的研究では、□**対照群が無かった**、□**言語面において改善が見られない要素があった**ことから、**リサーチ・デザインを改善した上で**(=対照群を作り、より高い英語力の学習者を研究参加者とし、ジャンルの種類と提示方法を変更する)再度、効果について検証する必要がある。

## 2. 研究の目的

ジャンル・アプローチの効果として、学習者の次の三つの変化に着目する。一つ目は、ジャンルに対する「**意識**」(genre awareness)、二つ目は、ジャンルの「**産出**」(genre production)、そして三つ目は学習者の「**言語力**」(language competence)である。

具体的には、次の三つのリサーチ・クエスチョンを設定した。

- (1) **ジャンル・アプローチは、日本人大学生のジャンル意識にどのような影響を与えるか。**
- (2) **学習者のジャンル意識は、文章力の発達とどう関わっているのか。**
- (3) **学習者のジャンル意識は、言語力の発達とどう関わっているのか。**

## 3. 研究の方法

本研究は、都内・理系私立大学で開講される「英語ライティング」コース（通年科目）で実施された。ジャンル・アプローチに基づく指導を受けた後の学習者のジャンル意識、文章、及び言語使用の変化を1年間に渡って縦断的に追跡することを目的とした。学習者の「ジャンル意識の変化」について調べるため、学期末のアンケート、及びインタビューでの学習者の発言を分析ソフト「NVivo」を用いて質的に分析した。さらに、学習者の「文章（ジャンルの産出）」及び「言語使用」の変化を調べるため、複数の時点で学習者が産出した文章をコーパス化し、量的手法で分析した。

#### 4. 研究成果

まず、アンケートとインタビューにおける回答を分析した結果、学習者は、授業開始時には、書くという行為を「正しい文法で英文を産出すること」と捉え、「正確さ」に注意を向ける傾向があった。そこには、相手意識や目的意識といった配慮が欠けており、コミュニケーションとしての作文教育が軽視されていた過去の学習経験が浮き彫りになった。しかし、1年間のジャンルに基づくライティング指導の前と後で産出した英文を質的・量的な観点から比較分析したところ、学習者の相手意識や言語意識には大きな変化が見られ、それは、英文を産出する際に実際に学習者が選択する語彙表現にも反映されていた。例えば、Eメールで「依頼」する状況では、I want you to...や can you...など単文レベルでの依頼から、I was wondering if you could...や I'd appreciate it if you could...など、複文レベルで、社会的状況に応じたより丁寧な依頼表現を選択できるようになっていた。また、読んだ文献について要約するといった学術的な文章では、文単位の情報をもとに名詞化することによって、より客観性のある科学的な文体で書けるようになっていた。

日本人学習者は、初等教育の頃から、「思ったことを思った通りに書く」という思索的な作文教育を受けており、「相手が分かるように書く」というコミュニケーション型の作文指導を十分に受けていないと言われる。本研究は、コミュニケーションとしての作文が過去の国語教育において軽視されていた可能性を浮き彫りにし、今後のライティング指導において（1）相手意識、（2）目的意識、（3）言語意識を持つことの三つが必要であることを示唆している。言語は、書き手と読み手、または話し手と聞き手という人間と人間の相互的な行為として成立する。どのような人にどのような目的で、どんな場面や状況で書いたり読んだりするのか、綿密な配慮が

なければ、その言語は不十分な機能しか発揮できない。文章を書くことは、そのための訓練であり、その訓練の効果を最大化するのに「ジャンル・アプローチ」は一つの鍵となるはずである。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Yasuda, S. (in press). EFL writing in Japanese instructional contexts: Present perspectives and future directives. *Asian EFL Journal* (in December 2014).

〔学会発表〕(計 7 件)

Yasuda, S. (2014). Foreign language writing in the era of globalization: Current issues and future directions. Japan, Asia, and the global Contexts: Connections across languages and societies. A symposium in honour of Helen Marriott. Monash University, Australia. March 15, 2014.

Yasuda, S. (2013). A systemic functional analysis of college students' academic summaries: The role of grammatical metaphor. Japan Society of English Language Education, Hoksuei Gakuen University. August 10-11, 2013.

板津木綿子, 保田幸子, 大井恭子 (2013). 学生アンケートによる日本の英語ライティング教育の実態調査 —大学入学前・入学後を比較して—. 全国英語教育学会. 北星学園大学. 2013年8月11日.

Yasuda, S. (2013). Developing academic literacy in a foreign language: A longitudinal study of EFL writers' meaning-making choices in an academic genre, American Association of Applied Linguistics (AAAL), Dallas, TX, USA, March 17, 2013.

大井恭子, 板津木綿子, 保田幸子 (2012). 大学におけるライティング教育のあり方: 実態調査報告. 九州英語教育学会. 長崎外国語大学. 2012年12月8日.

Yasuda, S. (2012). The implementation of SFL-informed genre pedagogy in the foreign language curriculum: A longitudinal study of writers' lexicogrammatical choices. Symposium

on Second Language Writing, Purdue University,  
IL, USA, September 26, 2012.

Yasuda, S. (2011). Genre-based approach in a  
foreign language context: Linking language and  
writing through genre. Symposium on Second  
Language Writing, Taipei, Taiwan, June 1, 2011.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

九州大学

<http://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/search/details/K004603>

Research Map

<http://researchmap.jp/read0206155/?lang=japanese>

個人ホームページ

<http://satchy.jimdo.com/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

保田幸子

九州大学言語文化研究院，言語教育講座

研究者番号：60386703

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )